Hijicho
大阪市立大学新聞

2013.6.3
第19号

Hijicho 大阪市立大学新聞

10面ぼっちめし
～ひとりぼっちは怖くない～

ニュース

市大の伝統守る 第122回ボート祭 ▶02面
市大存亡の危機 ～無関心ではいられない～ Vol.3 ▶08面
“いつでもどこでも陸上トーク” ▶15面
就職活動解禁 3月繰り下げへ ▶16面

コラム

教授が語る夢 vol.7 複合先端研究機構 橋本秀樹教授 ▶04面

その他

おもろい学生おりまっせ！ ▶06面
おトイレミシュラン☆ ～旧教養地区＋学情編～ ▶12面

Hijichoは、大阪市立大学新聞の発行のみならず、ニュースサイト「Hijicho Web」(http://hijicho.com) も運営しています。Hijicho Webでは、記事を随時更新しているので、リアルタイムな情報を得ることが可能です。皆さん、ぜひとも「Hijicho Web」もあわせてご利用ください。

市大の伝統守る 第122回ボート祭

第122回ボート祭が5月18日(土)、19日(日)に桜ノ宮・大川で開催された。今回は、その様子を写真でお伝えするとともに、ボート祭に携わる美術部青桃会や応援団、ボート祭実行委員長・本部長、ボート部、出場チームの方々へのインタビューを掲載する。

ボート祭とは？

ボート祭とは、大阪環状線・桜ノ宮駅近くの大川で行われるボートのレースだ。長い歴史を誇り、今回122回目を迎えた。レースは、5人で1つのボートを出艇し、体育系サークル・文化系サークル・学部・女子チーム・市民の5部門に分かれて競い合う。また、会場のステージでは音楽系サークルによる演奏なども行われ、会場全体が活気に満ちている。

18日当日は晴天に恵まれ、青い空の下、参加者たちは掛け声を掛け合い、チームで息を合わせて漕ぎ進みレースを楽しんでいた。しかしながら19日は、午後から雨天によりレースが中止され、決勝戦は行われなかった。そのため、順位は予選のタイムによって決定され、結果は以下のようになった。

第122回ボート祭成績
(http://hijicho.com/wp-content/uploads/ee6b4ab016c19f4bc9a43be3281e5404.pdf)

ボート祭フォトレポート

美術部青桃会

美術部青桃会は、開会式でライブアートを行った。以下の写真が完成した作品だ。中央に大きく描かれたボートを漕ぐ人の絵は躍動感に溢れ、美しく表現された波飛沫が、その躍動感をさらに力強いものにしている。ライブアートを終えた青桃会の部員の方にインタビューを行った。

写真＝ライブアートの作品

今回の作品で工夫した点は何ですか？

今までのライブアートは、音楽にあわせて激しく動き絵を描いていくというイメージが強かったと思います。一転して今回は、じっくりと絵を書くというところに重きを置き、事前に板に下書きを書いておくなどして、作品としての完成度にこだわりました。

どれぐらい練習しましたか？

1ヶ月間、1週間に2〜3回練習しました。練習は、ガレージに絵を描く板を立てかけて行いました。最初の頃は、絵の中の人が人の形になっていないなど、うまく書くことができず苦労しました。そこで、事前に下書きを行うことにして、練習を重ねていきました。また、水面のグラデーションなどの表現にもこだわりました。

この作品に込めた想いをお聞かせください。

初夏をイメージするとともに、ボートレースの「熱さ」を表現しました。「ボート祭を楽しんでください！!」というメッセージを込めて描きました。

応援団

応援団は、開会式での演舞やレース中の各ボートに対する応援などを行った。今回は、今春、応援団に新たに入部した一回生の方々にインタビューを行った。

写真＝応援団の一回生の方々

どのような想いでこの演舞に臨みましたか？

本番に臨むに当たって、間違えるかもしれないとても不安で、昨晩も一回生同士で振り付けなどの確認をし合いました。しかし、ステージにあがってみると、不安が気にならないぐらい演舞に夢中になり、楽しむことができました。

また、普段の練習はジャージで行なっているので、学ランやチアリーダーの衣装を着たのは、この本番が初めてでした。この服装に強いあこがれを抱いていたので、着ることができて本当に嬉しかったです。

ボート祭実行委員長・本部長

ボート祭実行委員長である体育会幹事長の尾形奈緒美さんと、本部長である体育会総務部長ボート祭担当の竹田涼介さんにインタビューを行った。

写真＝尾形奈緒美さんと竹田涼介さん

今回のボート祭で力を入れた点は何ですか？

今年は広報に力をいれましたが、成果は芳しくなかったです。実際出艇数は、昨年は100艇以上ありましたが、今年は95艇と100艇を割り込んでしまっています。なので、来年はより広報に力を入れていきたいと考えています。

運営してみていかがですか？

準備過程で大変なこともたくさんありましたが、こうして当日多くの人にいていただいて、楽しそうにしている姿を見ていると、やってよかったと心の底から思えます。今後とも、参加者の方々には安全に楽しんでもらいたいと思いますし、今回で122回目と伝統ある行事なので、200回を越えれるように伝統を積み重ねていきたいですね。

ボート部

ボート部主務担当の的場章浩さんにインタビューを行った。

写真＝ボート部主務担当の的場章浩さん

ボート部はボート祭においてどのような役割を担っているのですか？

当日の全般的な運営に携わっています。具体的には、会場で受付を行ったり、スタートの合図を送ったり、タイムの計測を行ったり、実際に参加者と共にボートに乗り込んで指導を行ったりしています。

参加者に、ボート祭に対してどのように取り組んでもらいたいですか？

ボートは、普段滅多に乗ることができないものだと思います。なので、この機会にボートを実際に漕いで、ボートの楽しさを知っていただけたらと思います。

今後ボート祭がどうなっていってほしいですか？

例えば、大阪府立大学の学生も参加してもらえたら、府市大間の交流ももっと盛んになると思います。また、現状市民の方々の参加が少ないので、市民の方々にもっと参加してもらうことで、ボート祭から大阪を盛り上げていきたいですね。

チーム「漕ぐ子デラックス」

会場に、非常にユニークな仮装をしている方々がいたので、インタビューを行った。チーム名は「漕ぐ子デラックス」、女子の部の出場チームだ。

写真＝チーム「漕ぐ子デラックス」の皆さん

皆さんは、どのような集まりなのでしょうか？

私たちは市大のOGで、在学時代SPLASHに所属していた集まりです。毎年このようなユニークな衣装を着てボート祭に出場し、その度に仮装賞をもらっています。この衣装は自分たちでこの日のために作成しました。なぜこの衣装にしたかというと、なんといっても目立つためです！！

文責：鶴木貴詩 (Hijicho)
写真：Hijichoスタッフ一同

教授が語る夢

複合先端研究機構
橋本秀樹教授

市大の様々な分野の教授にインタビューをし、個人的な夢や思想を聞くことで教授自身のことを深く追求していくコーナーです。第7回目は複合先端研究科/大学院理学研究科の橋本秀樹教授です。光合成の研究をしておられます。光合成の魅力から生き方まで、幅広くお話を伺ってきました。

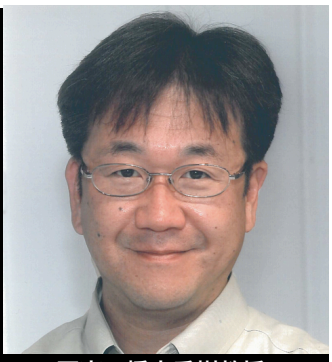


写真　橋本秀樹教授

光合成がもたらす新たな視点

―光合成とは

光合成は全ての生命活動の根源です。というのも大昔は地球に酸素がなかった。約80％が二酸化炭素だったんです。だんだん生き物が生まれてくる環境ができて、大気の二酸化炭素を吸収して酸素と有機物を生成する機能を持った光合成生物が誕生したのです。現在地球上に酸素が存在するのは光合成の結果です。また食物連鎖の原点も光合成です。例えば海の中を眺めると、植物性プランクトンや藻を小さな魚が食べて、小さな魚を大きな魚が食べて、それを繰り返して最後は人間が食する。陸も同じですね。光合成がなければ何も生きられない。

しかも植物は光合成と呼吸によって自ら必要なエネルギーを生み出しています。一方動物は外部から糖を摂取しないと必要なエネルギーを作れない。だから実は植物の方が偉いんです。歴史も古いですしね。

―どのような研究を行っているのですか

植物が明反応においてどのように光エネルギーを取り込んでいるのかを研究しています。

※よくわかる解説

光合成は暗反応と明反応から成ります。暗反応は水と二酸化炭素からデンプン(糖)を生成する反応ですが、これに対して明反応は、光エネルギーを暗反応に必要な生体エネルギー (アデノシン三リン酸（ATP）とニコチンアミドアデニンジヌクレオチドリン酸（NADPH）) に変換する仕組みです。この途中で水を分解して酸素を発生します。つまり光合成は、生命活動に必要なATPやNADPHをつくり、そのエネルギーを利用して二酸化炭素を糖に変換する反応です。酸素は副産物という訳です。このようにして植物は糖を体内で生産し蓄えます。そして、光がないときには、蓄えた糖と酸素の反応、いわゆる呼吸によって、エネルギーを生み出します。光合成と呼吸によって植物はいつでも必要なエネルギーを作り出すことができるのです。

植物は複雑な反応によって光の粒子を一つ残らず効率的に取り込んで利用しているんです。光合成の中で一番大事な部分ですね。光合成の過程で植物が光を捕まえる仕組みを解明すれば太陽光エネルギーの利用に対して全く新しい視点を得ることができるのではないかと考えています。人間は今、太陽光エネルギーを利用しようと太陽電池を開発したりしていますよね。でもなかなか太陽光を100％利用する技術はありません。植物はいとも簡単にそれをやっています。光合成の真似をして二酸化炭素と水から燃料が作れれば、人間が呼吸によって排出した二酸化炭素を上手く利用できるんですよ。そうした技術が開発できれば、深刻なエネルギー問題の解決にもつながるでしょう。

追究すれば道は開ける

―なぜ光合成研究の道に？

学生の頃から研究しています。理学部化学科だったのですが、当時も境界領域の研究が注目されていて、特に生物、化学、物理の3つの領域をまたぐ境界領域はすごく先端的だった。僕は生命に携わる研究がしたいな、と考えていて、たまたま光合成の研究室を選びました。4年生で研究を始めたのですが、すぐさま良い研究結果が得られたのです。国際会議で発表しました。(笑)世界中からすごく注目されたんです。

学問の世界では正しく仕事をすれば、年齢や国籍に関係なく評価される。どんなに偉い先生でも私の発表を真摯な姿勢で聞いてくれる。アカデミアの素晴らしいところだと思います。そこに憧れを感じて学者になろうと決めました。大学院では最初の3年間全く成果が出なかったのですが、3年目に現在の教科書に載るような大きな仕事ができました。それでもうやめられなくなりました。(笑)

僕は化学科出身ですが、最初は工学部の応用物理学科に就職し、その後静岡大学に移りました。そこで偶然にもイギリスの光合成研究の先駆者のもとで生命科学の研究手法を学ぶ機会を得ることができました。物理、化学、生命科学、と全ての武器がそろったんです。なにか1つ興味のあることを見つけたら、それを深く掘り下げていくと今度は横に広がっていくものなのです。そういう風に学んでいくと将来は開けますよ。

—将来の夢は？

最後まで人生を楽しみたいですね。一生青春していたいです。

僕はとにかく興味のあることを追究したくなるんです。最近では海洋生物の光合成に関心があって、自分で沖縄まで新しい海洋生物を探しにいきます。潜らないといけないのでスキューバーダイビングのライセンスも取りました。体力をつけるために空手道も始めました。3段を持っていて市大で空手道を教えています。

大学はホーム　原点を大切に

—市大生に伝えたいことは何ですか？

母校愛を持ってほしいです。自分の人生のアイデンティティだから。人間は原点回帰を忘れてはいけません。自分は結局何者で、どこから来たのか、どこへ向かうのか。常に人は悩むけれど、原点が揺らぐとどこにもいけないですよね。原点が豊かであれば人生は豊かになる。だから家庭 (ホーム) が大事なのです。大学は家です。何歳になっても困ったときに帰って来れる場所が大学です。その大学を良くしたいという気持ちを皆が持っていれば市大はもっともっと良くなると思います。

あと話はそれますが、2号館の開放厳禁の扉は閉めてくださいね。開けっ放しにしておくと、下手をすれば数千万円の装置が壊れてしまう危険性があるんですよ！(笑)

石原奈甫美 (Hijicho)

おもろい学生おりまっせ！
第8回〜生物部・前田有紀〜

構内をキックボードで颯爽と移動する彼女を、目にしたことはないだろうか。今回の「おもがく」は、理学部生物学科2回生の前田有紀 (まえだ ゆき) さんに迫る。

写真＝前田有紀さん

生物が好き！

―今一番力を入れていることは？

生物部の活動ですね。生物部は2011年11月1日に立ち上げたサークルです。

透明骨格標本って知ってますか？動物の骨に着色し、肉を透明にすることで、生きているときの状態に近い状態で動物の骨格を観察できるというものなんです。ロマンを感じますよね！この標本は、すでに作り方が確立されており、論文などで発表されているのですが、高価な溶液や危険な薬品を使います。そこで生物部では、この透明骨格標本を、パイプユニッシュや食酢など身近にある材料で安価に作れないかということを研究しています。生物部の立ち上げ当初から取り組んでおり、試行錯誤を繰り返しながら毎日実験と観察を重ねています。

また現在は、JAXAが行っている、アズキの種子を宇宙に打ち上げる実験に協力しています。生物学科の曽我康一先生がもともとこの「アジアの種子」というJAXAのプロジェクトに関わっていたことから、生物部も一緒に研究させていただいています。

具体的には、打ち上げたあとにアズキがきっちり生育するようにカビない条件と地上での対照実験を行うために成長を均一にするための条件の研究をしています。また、3月に、パラボリックフライト (航空機実験) という地上で無重力空間を作る前実験を行いました。これは、8月に種子島で打ち上げがあり、9月には学会発表が控えています。数億円がかかったプロジェクトなので、緊張していますが、とても楽しみです。この実験は、将来的に人間が火星など地球外に住むときに活きてきます。宇宙で植物を栽培できれば、地上での食料問題の解決などに結びつくと考えられています。

生物部の部員は現在25人ほど、生物学科のメンバーだけではなく文系の学生もいます。こういったプロジェクトへの参加や学会での発表などを通じて、実績を重ねて、後世に繋げていきたいですね。自然史博物館が行っている大和川の生態系調査なども、連携してやっていけたらと考えています。

写真＝生物部の活動の様子 (前田さん提供)

―他に力を入れていることはありますか？

あとはコミュニケーションですね。自分からいろいろなことに飛び込んでいます。教授にも直接メールでコンタクトを取ったりして、何かお手伝いできることがあれば呼んでもらえるようにお願いしています。

生物学科では、3回生になってから専門の実験が始まるので、1回生、2回生のうちは専門的な実験が出来ないんです。でも、せっかく大学に入ったのにそれではもったいない。自分でも何かやりたいと思うんです。

―休日の過ごし方は？

バイトですね。学費を賄うために、4つ掛け持ちしています。

塾講師や家庭教師をやっているのですが、数学を教えるときにもつい生物の小ネタを挟んでしまいます。生徒からは引かれますが(笑)

―趣味は何ですか。

生物部が趣味ですね。生物関連のことが好きなので。あとは、釣りも趣味にしていきたいなあと思っています。

また、この前は、自然史博物館のイベントのボランティアで知り合った外部の友人と一緒にご飯に行きました。そのときも生物トークばかりしているので、気持ち悪いと思いますよ(笑)

―20万円あったら何をする？

リアルに言うと、学費ですね！あと、生物部で使うための部屋を借りたいです。部室がないので…。

貯金が出来ないタイプなので、すぐに使ってしまいます。

―大切だと思う感情は？

「楽しい」です。とにかく、楽しむことが重要だと思います。好奇心、興味を大事にしています。

―1回生の間で後悔はありますか？

学校の勉強をもうちょっとやっておけばよかったなあと思っています(笑) サークルとバイトと、あと趣味で論文を読んだりしていたら、一日24時間で足りなくて…。だから、これからは勉強も頑張っていきたいですね。

アクティブに動くほうは、満足しています。

―あなたにとって生物とは？

「生きがい」です。自分の好奇心ですよね。

例えばいち生物の人間だって、こうやって話して意思疎通できるのもすごくないですか？人間の行動で言うと、社会学、心理学、教育などにも興味があり、 少し齧っています。

だいたいの、生きとし生けるもの、全部好きです！

―新入生にメッセージを。

大学生活、短い4年間ですが、楽しんでいきましょう！楽しまなきゃ損です。

キックボード女子の真相

(前田)最後に一つ言わせてください！

―なんですか・・・？

「私は好んでキックボードに乗っているわけではないんです！」(笑)

実は去年の冬、念願の自転車を買ったんですが、すぐに盗難に遭ったんです。そこで、お金がかからず移動が早くできるものは…と考えて、家に眠っているキックボードを思いつきました。これは使わないともったいない！と。

ただ、少数だとやはり目立つので、もっとキックボード人口が増えてほしいです。みんなでキックボードに乗ろうっていう布教活動をしています。

それと、私のキックボードはプラスチック製なので、段差などにとても弱いんです。ゴム製のタイヤに改良する技術をお持ちの方、大募集中です。(笑)

長澤彩香 (Hijicho)

From editor

取材中、何度も彼女の口から出た、「楽しい」という単語。そして、言葉に負けないわくわくした表情。生物の面白さを彼女に語らせると止まらない。

読者の皆さんは、今、やりたいことを全力でやれているだろうか。やりたいと思っても躊躇ってしまったり、引っ込み思案になってしまうこともあるかもしれない。

そんな中、「やりたいならやればいい」と言うモットーを持ち、自らの興味をとことんまで探究する彼女は、限られた大学生としての時間を存分に活用しているように見えた。

大学生活は一般的には4年間、この自由な時間を謳歌できるのは人生で約5%のの中の限られた時間なのである。興味・関心の方向は人それぞれだが、自分から積極的に追究する姿勢を持つことで有意義な大学生活を送れるのではないかと、彼女のインタビューを通して感じた。

キックボードでキャンパスを移動する彼女を見かけた際には、躊躇わずに声をかけてみてほしい。きっと、彼女のエネルギーを身を持って感じ、刺激を受けることができるはずだ。

関連リンク

大阪市立大学 プレスリリース　2012年2月28日
アジア地域の国際宇宙ステーション利用促進「アジアの種子2013」計画 (http://www.osaka-cu.ac.jp/ja/news/2012/rjx1ru)

市大存亡の危機
～無関心ではいられない～ Vol.3

「市大存亡の危機～無関心ではいられない～」は大阪府市大統合について様々な視点から切り込んでいき、学生の皆さんに問題意識を持ってもらうことを目的としたコーナーである。3回目となる今回は、新大学構想〈提言〉・新大学ビジョン (案) から統合についてどのような構想が持たれているか紐解いていこうと思う。

新大学構想〈提言〉と新大学ビジョン (案)

平成25年1月18日、外部有識者6名からなる大阪府市新大学構想会議から出された、新大学についての構想をまとめたものが新大学構想〈提言〉である。それを受けて平成25年4月、大阪府と大阪市では、両大学からの意見聴取や議会での議論、府の戦略本部会議と市の戦略会議での審議を経て、「新大学ビジョン (案) 」を策定した。

今後、大阪府と大阪市では、新大学ビジョン (案) についてのパブリックコメントを実施するとともに、本年8月を目処に府、市、大阪府立大学及び大阪市立大学で策定する「新大学 (案) 」において、より具体的な内容を取りまとめるとしている。

すなわち、新大学構想〈提言〉外部有識者ら→新大学ビジョン (案) /大阪府市→新大学 (案) /大阪府市・両大学、という順序で統合に関する構想が練られていくというわけである。大学側が構想に対して具体的な意見をできるのはこの3つのプロセスの中で最後の段階ということになる。

こうして今年度中に両大学教員による統合に関する検討がなされたのち、来年26年度には統合に向けた体制の一元化が進められる (法人事務組織の統合など) 。27年度には経営面での同一化を図るため法人統一がなされ、28年度には大学統合を図り、新大学がスタートする予定である。

〈提言〉の大まかな構成

1.両大学の現況
2.現状確認と課題
3.改革の基本方針
4.新大学構想 改革の3本柱と15の重点項目

新大学ビジョン (案) の大まかな構成

1.なぜ、今大学統合か
2.新大学の理念
3.理念実現に向けた戦略
4.理念実現に向けた教育研究体制
5.新大学キャンパス像
6.新大学に向けたスケジュール (案)

この二つの資料を基に新大学の構想を読み解いていく。

両大学の現状と課題・新大学の理念

大阪府立大学・大阪市立大学の両大学において、以下のような現状認識が持たれている。

・公立大学の使命である地域貢献について高い評価を受けている。

・学生一人当たりの運営交付金は他の公立大学と同水準であり、国立大学よりは低水準にある。

・両大学の運営交付金は公立大学法人化後、急速に減少している。

・これに対して両大学は大幅な人件費対策を実施 (それに伴う広範な非常勤化、組織としてのパフォーマンスの低下) し、府大では3大学再編統合や教育研究体制の改革などの大幅な改革を実施した。

・統合により、学部・分野の構成では、ほぼ国立の基幹大学が有する構成となり、 (単純合計の) 学生数では全国の公立大学で最大規模となる。

・グローバル化の進展により国際的な大学間競争が激化する中で、世界の大学と戦うには両大学とも規模が小さく、このままでは埋没しかねない状況である。

・両大学で重複する分野を見直し、今後集中すべき分野や補強する必要のある分野に人的資源を再配分する必要がある。

・基礎研究に重点が置かれた市大と、学際的・応用分野研究に重点が置かれた府大という、それぞれの強みを活かし、シナジー効果を生み出すための工夫が必要。

上記のような現状認識を踏まえて、次のような4つの理念が掲げられた。

「研究で世界と戦う大学」

アジアにおける研究者交流の拠点となる大学を目指すこと、社会が求める先端研究の推進・研究成果の社会への還元、それによる大阪の成長を支える知的インフラの役割を果たすこと、国内外の大学・企業・自治体等との連携の進展を図り、国際的に高い学術評価を目指すとしている。

その実現のために、統合のメリットを活かした分野の垣根を超えた研究や、基礎から応用までの一貫した研究を充実させること、国内外の多くの大学や企業等と共同研究を進めること、新大学の強みを発揮する分野や戦略的研究分野に集中投資を行うことなどが、具体的戦略として考えられている。

「次代を拓く人材を育成する大学」

基礎と応用を併せ持つ大学の特徴を活かし、次代に求められる幅広い教養と高度な専門知識を兼ね備えた人材を養成すること、学士課程における教養教育・基礎的な専門教育の一層の強化、国際的に活躍できるグローバル人材の育成を目指すとしている。

実現のために、外国語教育 (特に英語) の実践的能力養成の強化、海外の大学との連携の促進・単位認定大学の拡充・経済的支援などによる留学支援の強化、海外からの留学生受け入れの拡充、奨学金制度・学生生活面での支援・障がいのある学生への支援などによる学生支援の充実といった戦略が考えられている。

「地域活力の源泉となる大学」

高大連携・産学官連携・地域問題の解決などを通して地域貢献という公立大学の使命を果たすこと、公開講座等を展開して地域住民の主体的な参加を促進すること、それらを通して地域に開かれた大学を実現することなどを目的としている。

実現のために、大阪の企業との共同研究等の増加に努め、地域産業の振興に貢献すること、医工連携や大阪文化を核とした観光振興など、強い大阪の実現に貢献する研究活動に取り組むこと、大阪の発展に貢献する・起業家精神を持った人材を育てること、小中高教育機関との連携、地域の教育拠点化などがうたわれている。

「柔軟で持続的に改革する大学」

新たな教学体制のもと、教育ニーズへの柔軟な対応と効率的な組織運営を図ること、教員組織・研究成果等を定期的に見直し (評価し) 、それに基づき柔軟に・持続的に教育の質の確保に努めることなどを目指すとしている。

実現のために、理事長・学長を分離し、教学と経営の一層の充実とともに、ガバナンス強化を図ること、採用・昇任・配置転換などの教員人事システムを革新すること、大学運営における教職協働体制を確立すること、ブランド力アップ・広報戦略の強化を図ること、財務体質の強化を図り、自律性の高い運営をめざすこと、法人の自律した運営を妨げる様々な制約の撤廃に取り組むことなどが、戦略として考えられている。

終わりに

今回は両大学の現状・課題、新大学の理念の部分を大まかに要約してみた。〈提言〉と「新大学ビジョン (案) 」にはもう少し詳細に書かれているのだが、ここではその一部を抽出し、要約した。今回要約した部分を見てみると、「グローバル化」や「地域貢献」、「社会貢献」、「産官学連携」といったキーワードが多用されていることに気付いた。果たしてこうしたキーワードが具体的にどのように達成されていくのか、次回は大学構想の3本の柱と重点政策について詳しく見ていこうと思う。

橋本啓佑 (Hijicho)

参考

新大学構想〈提言〉
(http://www.pref.osaka.jp/attach/16822/00000000/honpen.pdf)

新大学ビジョン (案)
(http://www.pref.osaka.jp/attach/16822/00000000/bijon.pdf)

ぼ っ ち め し
～ひとりぼっちは怖くない～

皆さんはこんな経験をされたことはないだろうか。

昼休みに友達と弁当を食べるつもりだったのに予定が合わなくて急遽一人に…。授業のコマが合わなくて友達とお昼が食べられない…。しかし一人で食べるのは少し恥ずかしい。

確かに友達同士の会話が賑やかに繰り広げられる中で自分だけ一人で食べるのはなんとなく気恥ずかしい部分もある。そういった場合、ついつい授業後の教室などで急いで済ませてしまうことも少なくないだろう。

しかしここで一度考えてみよう。友達と話しながら食べる食事だけが楽しい食事なのだろうか。一人で落ち着いて食べる時の方が食事自体を楽しめていることもあるのではないだろうか。
そう、一人で食べることは決して恥ずかしいことではない。むしろせっかくの食事をおいしく味わうための手段なのだ。

というわけで今回はそんな時に役立つ「ぼっちめしスポット」をいくつか紹介しよう。

スポット紹介

・法学部棟奥の中庭

人気も少なく全体的に落ち着いた雰囲気。周囲を建物に囲まれていながら緑も豊富にあるので、木陰で涼むこともできる。また、席数も多くあり、好きな場所で食べられる所もポイント。周囲の喧噪を離れて静かに食べたい時に最適。

・本館地区校門右手のベンチ

本館地区の南国情緒あふれる景色を真っ正面から眺められるスポット。ちょうど木陰になっており、日差しがきつくなるこれからの季節でも快適に過ごせるだろう。場所柄人通りはかなりあるが、景観のおかげでさながらリゾート地にいるかのような感覚を覚えるので問題無し。

・旧教養地区8号館交流談話室

8号館の正面階段を上ってすぐにあるスポット。昼間でも人が少なく、かつ室内であるためゆっくり落ち着いて食べたいときに便利。またテーブルもあるので昼食後に課題にとりくむこともできる。筆者的には一番のおすすめスポット。

・学情1F

利用者はかなり多いものの個人ブースが多数確保されており、周囲を気にせず食べることができる。窓が大きくて開放的なのもよい。また、市大のほぼ中間地点に位置しており、次の時間にどの場所で授業があるかにかかわらず使用できる点も魅力。

以上が今回紹介する「ぼっちめしスポット」であるが、どの場所も食事を引き立ててくれること間違いないだろう。また市大内にはまだまだおもしろい場所が眠っているだろうから自分だけの秘境を見つけるのもいい。

友達と一緒に食べるのもいいけれど、たまには「ぼっちめし」も悪くない。皆さんもぜひ一度「ぼっちめし」を試してみてほしい。

古迫肇 (Hijicho)
松本慎也 (Hijicho)

おトイレミシュラン☆
～旧教養地区＋学情編～

おトイレミシュラン☆とは・・・

トイレとは毎日誰もが使っている場所であり、生活の一部であるとともに、安らぎの場でもある。市大生がより快適なトイレライフを過ごせるよう、Hijichoが独自に大学内のトイレ事情についての分析を行い、快適なトイレについて探求そして調査を行ない大学内にある理想的なトイレについて読者にランキング形式で紹介するコーナーである。

快適なトイレとは

一言に快適なトイレといわれても、それぞれが理想とするトイレのあり方は各々で異なるだろう。そこで、我々は快適なトイレに欠かすことのできないであろう５つのポイントを考え出した。

その5つのポイントとは

1.清潔であること
2.設備が充実していること
3.利便性がよいこと
4.静かであること
5.広いこと

今回のおトイレミシュラン☆では、上記の５つのポイントを評価の指標として用いて、それぞれのトイレについて分析、評価を行った。

評価方法の仕方

今回は上記の５つの指標を用いて、加点方式で採点を行っていく。

1.清潔度 (15点満点)
〇チェックポイント
・トイレが清潔な状態を保っているか
・においはないか
・便器便座は清潔か
・床は清潔か
・洗面台周辺は水で濡れていないか

2.設備の充実度 (15点満点)
〇チェックポイント
・トイレ内の設備の新しさ
・洗面台などの自動化
・ウォシュレットなどの施設の充実さ
・トイレットペーパーがきちんと補充しているか
・ゴミ箱などが設置してあるか
・石鹸が洗面台に十分に補充しているか

３.利便性 (10点満点)
〇チェックポイント
・場所のわかりやすさ
・エントランスや教室などからアクセスしやすいか
・外からのアクセスも考え低層階にあるか

４.閑静さ (10点満点)
〇チェックポイント
・利用者が多すぎないか
・落ち着ける空間であるか
・トイレ周辺の環境

５.広さ (10点満点)
〇チェックポイント
・トイレの規模、数
・個室の広さ
・洗面台の数、広さ

の合計６０点満点で評価する。

調査範囲

今回は旧教養地区と学術情報総合センター（以下学情）にある、学部にかかわらずよく学生が利用するトイレ合計２３か所について複数名の調査員がそれぞれ調査を行った。

★による評価について

今回の調査ではおトイレミシュラン☆と銘打ってあ　るように、本家ミシュランガイドと同様、星印★を用いて評価を行う。

星の数には次のような意味を持つ。

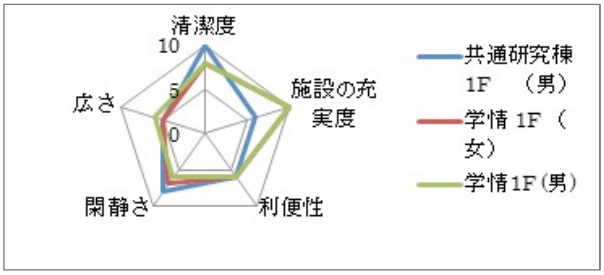
★ (1つ星)
－ 快適に用を足せるトイレ
★★　(2つ星)
－ 極めて快適であり、近くに別のトイレがあったとしても、遠回りしてでも行く価値のあるトイレ
★★★ (3つ星)
－ そのトイレに行くために杉本町駅からわざわざ大学へ戻りたくなるほど価値のある卓越して快適なトイレ

なお星の数は以下のように評価の点数で決まる。
32点–35点　★
36点–39点　★★
40点–　★★★

トイレにうるさいHijichoトイレ調査員も納得の星付きトイレ一覧

★★★ (3つ星)　40点–
・共通研究棟　1F (男子トイレ) 41点
・学情　1F　(女子トイレ) 40点
・学情　1F　(男子トイレ) 40点

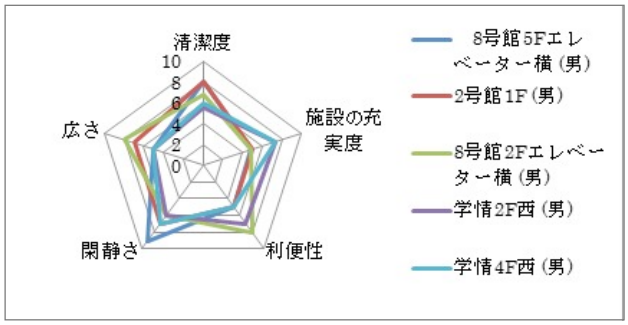
栄えある総合1位に輝いたのはまだ竣工して間もない8号館とテニスコートに挟まれた場所に立地している共通研究棟1Fの男子トイレである。規模こそは小さいものの設備も新しく清潔に保たれており、清潔度では満点に近い14点をマークした。また特筆すべき点は多目的トイレがほかの場所のものと比べ広く、バリアフリー施設も充実している点である。

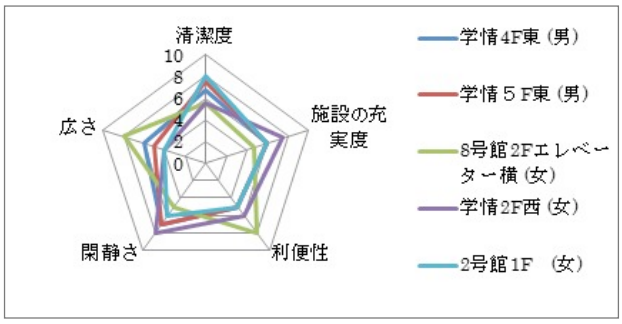


※各グラフの清潔度、施設の充実度は10点満点に換算している。

2位、3位は共に学情1Fのトイレ。学情内のトイレの中では最も規模が大きく、そして注目すべき点は今回調査したトイレの中で唯一ウォシュレットが完備されている点である。そのため施設の充実度ではともに満点に近い14点という高得点を獲得した。

★★ (2つ星) 36点―39点
・8号館5Fエレベーター横　(男子トイレ)　38点
・8号館2Fエレベーター横　(男子トイレ)　37点
・2号館 1F　(男子トイレ)　38点
・学情2F西（杉本町側）　(男子トイレ)　37点
・学情4F西（杉本町側）　(男子トイレ)　37点
・学情4F東（8号館側）　(男子トイレ)　37点
・学情5F東（8号館側）　(男子トイレ)　37点
・8号館2Fエレベーター横　(女子トイレ)　36点
・学情2F西（杉本町側）　(女子トイレ)　36点
・2号館1F　(女子トイレ)　36点





2つ星は男女合わせて10か所のトイレがランクインした。比較的設備が新しく自動化が進んでいる学情のトイレが設備の充実度で高得点を獲得し2つ星に多くランクインしていることがわかる。ここで注目すべき点は男女ともに2つ星にランクインしている8号館2Fエレベーター横と2号館1Fと学情2F西の3つのトイレである。

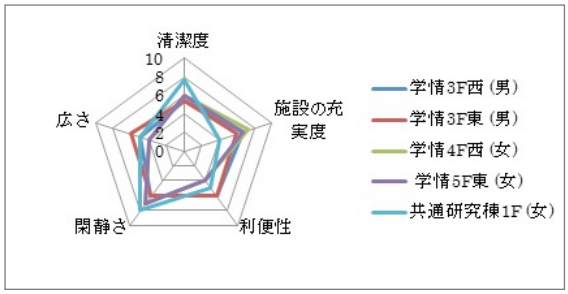
8号館2Fは8号館の中では最も高得点であり、8号館の女子トイレでは唯一の星付き。その理由としては、8号館2Fは他の階と比べ教室数が少なく、そして授業で使われることも少ないことがあげられる。またトイレの規模もかなり大きく、利便性にもすぐれ、かつ比較的清潔な状態が保たれておりすべての項目で高得点をマークした。まさに8号館の穴場的スポットである。

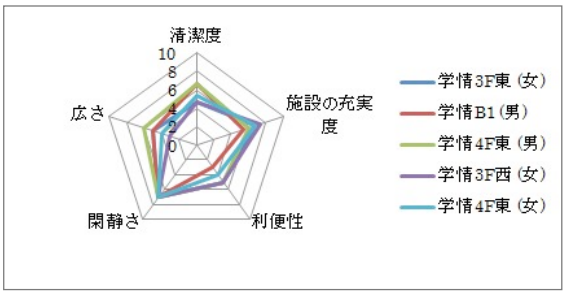
2号館1Fのトイレは入りにくい雰囲気もあり、場所が分かりにくいものの、旧体育館にも隣接しており、施設の新しさや清潔さも調査したトイレの中ではトップクラスであり女子トイレの清潔度の項目では堂々の1位に輝いた。

学情２F西トイレはともに学情1Fに続いて高得点を獲得した。場所もわかりやすくまた学情内の他のトイレと比べ、利用者も比較的少ないようだ。

★ (1つ星) 32点―35点

- 学情3F西（杉本町側）　(男子トイレ)　35点
- 学情3F東（8号館側）　(男子トイレ)　35点
- 学情4F西（杉本町側）　(女子トイレ)　35点
- 学情5F東(8号館側)　(女子トイレ)　35点
- 共通研究棟1F　(女子トイレ)　34点
- 学情3F東(8号館側)　(女子トイレ)　34点
- 学情B1　(男子トイレ)　33点
- 学情4F東(8号館側)　(男子トイレ)　33点
- 学情3F西（杉本町側）　(女子トイレ)　33点
- 学情4F東(8号館側)　(女子トイレ)　33点





一つ星は男女合わせて10か所がランクイン。ここでもやはり学情強し。共通研究棟1Fの女子トイレ以外はすべて学情のトイレが占める結果となった。ちなみに学情の星付きトイレは男女合わせて全18か所中16か所がランクインしており中でもでも男子トイレはすべて星付きトイレとなっている。共通研究棟1Fの女子トイレは総合1位になった3つ星の男子トイレとは対照的な結果となった。その原因は女子トイレは個室がたった1つしかないという点があげられる。共通研究棟は主に女子の少ない理系が利用するためにこのように個室が1か所しかないのではないかと考えられる。

もっと詳しく各トイレの評価、概要を知りたい方はこちら　個室、洗面台の数、バリアフリー施設などの各トイレの設備についての情報を載せています。

おトイレミシュラン☆トイレデータ完全網羅版
旧教養地区＋学情編　男子トイレVer –
(http://hijicho.com/wp-content/uploads/da9aca69532fbe6fbbecae43a4561778.pdf)

おトイレミシュラン☆　トイレデータ完全網羅版
旧教養地区＋学情編　女子トイレVer –
(http://hijicho.com/wp-content/uploads/838368e693b6693a2d9ec46e9c603f30.pdf)

From　Editor

今回の調査を通して、日常的にみんなが利用していながら、今まであまりクローズアップされることのなかった市大のトイレ事情について知ることができ、建物が違えばトイレの様相も大きく異なっていることを改めて実感した。トイレはまさしくその建物の裏の顔でもあり、それぞれのトイレを見るとおのずとその建物がどういった人がどのように使っているのかが見えてくる。

今回の調査では男女で別に評価を行ったが全体的に男子トイレと比べ女子トイレは点数が低いという結果となった。男女ではトイレに求めるものや見るポイントが違うのであろうが、それでも予想以上に点差がついたことに驚かされた。それだけ私たちの想像以上に男女のトイレ事情は異なっているのであろう。

このおトイレミシュラン☆を参考にして、多くの人がより快適なキャンパス・トイレライフを送ることができたならば幸いである。

※注意※
今回の調査による評価はあくまでもHijichoトイレ調査員の個人的評価であるのであしからず

町田和紀 (Hijicho)

“いつでもどこでも陸上トーク”

大阪市立大学陸上部の部員数名が、大阪陸上競技協会の2012年度の成績の中で、１0位以内にランクインした。また2013年度5月9日～12日に行われた関西インカレ2部において400mハードル、800m、4×400mリレーにて大阪市立大学陸上部が優勝した。このことを受けて陸上部主将の木場翔一郎さん(経3)と主務の森川禎彦さん(経3)にお話を伺った。

写真=陸上部主務の森川さん(左)と主将の木場さん(右)

―大阪市立大学陸上部はどのような練習をされているんですか？

陸上部には現在70名を超えるメンバーがいます。各々 (例えば、長距離・短距離・走り幅跳び等の) 専門があって、種目に分かれて練習をしています。陸上というと走っているイメージが強いかもしれませんが、体を温める準備体操やフォームの練習等多岐にわたる練習を行っています。実際に走り込みをする前に1時間以上も費やすんですよ。走る・跳ぶ・投げるなど様々な活動を行っております。

―今回の結果をどう感じますか？

率直にうれしいです。でもまだまだ改善点はあると感じているので陸上部一丸となって練習に励みたいですね。

実際僕らもそうなんですが、陸上部は中学や高校で陸上をやっていた人が多いです。でも試合慣れすることはなくて、今でも試合前は緊張します。そういう時は平常心を保てるように深呼吸をして心を落ち着かせ、集中することを心がけています。自己ベストを更新するには向上心が必要なので、自分を高める努力をします。部員と話すのも専ら陸上トークですよ。(笑)

―市大の好きなところは?

のんびりした雰囲気が好きですね。あとは平地にあるところ。山の中に建っている大学が多いと思うので、平地にあるのは陸上の練習する上でもありがたいですね。

文責：石原奈甫美 (Hijicho)
写真：大塚成美 (Hijicho)

From editor

陸上の話をしているお2人はとても楽しそうだった。陸上には腰が重要だそうで、自主的に食事制限等をすることで腰の位置が下がるのを防げるそうだ。インタビューの中で彼らのストイックな姿勢を垣間見ることができた。今後も大阪市立大学陸上部の活躍を期待したい。そして、陸上界に市大の名前を轟かせていただきたい。

就職活動解禁 3月繰り下げへ
～就職支援室へのインタビュー～

大学生の就職活動の解禁時期が、2016年卒の学生 (現2回生) から、現行の大学3回生の12月から大学3回生の3月に繰り下げになる。安倍晋三首相が今年4月19日に経団連、経済同友会、日本商工会議所に要請し、経済3団体側が受け入れを表明したからだ。

解禁は3月、面接は8月に

現行の経団連の倫理憲章のもとでは、3回生の12月に会社説明会などの広報活動が解禁され、4月から筆記試験や面接など選考活動が行われている。解禁が3回生の3月に繰り下げになると、選考活動は8月に行われることになる。

学生が学業に専念することを目的とする

今回の繰り下げは、国の成長戦略の一環。スタートを遅くし就職活動期間を短縮することで、学生が学業に専念することを目的としている。また、学生たちも帰国した8月から採用選考活動ができるよう、海外留学からの帰国者の就職環境の改善を図ることも目的としている。

就職活動の繰り下げに関して、本学の就職支援室長の岩川和朗さんとの鼎談を行った。(※鼎談を行ったのは、Hijichoスタッフの鶴木と石原。)

ニュースを受けて

鶴木：時期をずらすだけでは、就職活動による学業への支障に対する根本的な解決に至らないのではないか、というのが私の考えです。今回の繰り下げは、学生が学業に専念できるようにすることを目的としています。しかしながら、4回生時は卒業論文の執筆など、学業にも相応の時間を割く必要があり、限られた時間のなかで、就職活動と学業を両立していかなければならないという点で変わりはありません。

現行の就職活動システムの下では、学生は就職活動においてしっかりと軸を定めて、受ける企業を絞っていく必要があるでしょう。とりあえず名の通った企業にエントリーしてみるなどの乱れ打ちのような就職活動では、両立していくことは厳しいでしょう。

岩川さん：そのとおりです。就職活動に影響があるとかないとか、そのような表現が多くのメディアで使われています。全般的に言えるのは、時期がどうとかではなく、就職活動のスタートまでに意識をどれだけ高めていけるか、しっかりした考え方をもって就職活動に臨めるかにかかっているのではと思います。

就職活動までの過ごし方

鶴木：本学の就職ガイダンスで、しっかりした考えを持つためには、就職活動はゴールではないという意識を持ち、どのように社会で活躍するかイメージを固めることが必要だというお話をお聞きしました。では就職活動まで、どのように大学生活を過ごすべきでしょうか?

岩川さん：就職活動までは、勉強や部活、バイトをして学生生活を満喫してください。本学のガイダンスでは、働くとは、仕事とは、等を、就職活動までにじっくり考えてもらおうというスタンスでやっています。それまでの間は、学生らしい生活をいかに自分たちで過ごせるかが重要でしょう。

就職活動に関しては、様々な情報があふれています。例えばインターンシップなどに参加するにしても、いつから始めるのがいい、悪いではなく、始まるまでに目的意識をもって取り組んでいけるかが大切となってきます。

石原：本学の就職支援では、どこに力を入れていますか？

岩川さん：個別指導とガイダンスに力を入れています。本学では大学職員自らがガイダンスを実施するというところに重きを置いていて、今後もそこは続けていきたいと考えています。なぜなら、外部の方ではなく大学にいる私たちが直接学生と話をしたほうが伝わるのではないかと考えています。
また、高原記念館で行なっている企業セミナーのように、直接企業の方と学生が話をできる機会を設けています。そういうことも今後続けていきたいと考えています。

鶴木貴詩 (Hijicho)

From editor

今回の就職活動の解禁時期の繰り下げにより、学生にはさらなる負担を迫られる可能性が高い。就職先が決まらなかった場合にそこから新しい企業を探すのが大変であるし、卒業までに内定が出ず就活浪人をする学生が増加するという事態も考えられる。

このような中で、就職活動に取り組んでいくためには、自分の適性を冷静に分析し、考えを固め、志望する業種や企業を早期に絞り込むなど、周到な準備が必要だろう。そのために、就職支援室のガイダンスなどを活用していくとよいだろう。